みんなで考える日本の国柄

アクティブラーニングで学ぼう

はじめに

みなさんは国柄という言葉を聞いたことがあるでしょうか。もしかしたら、聞き慣れない言葉なのかもしれませんが、たとえばこういうのは聞いたことありませんか？
アメリカは自由の国だ。フランスは平等の国だ。
これを国柄と言います。そして、国柄というのはその国の歴史の根っこにあるもので、その国柄によって国が作られると言ってもいいほどです。
では、日本の国柄とは何でしょうか。
日本にも国柄があり、その国柄が2,000年以上前から受け継がれ、国を作っています。この本では、みなさんと一緒に日本の国柄を考えたいと思います。国柄が分かると、日本で起こった様々なできごとの理解が深まるだけでなく、これからどうすれば良いのかということさえも見えてくるかもしれません。

4 日本の生い立ち｜日本と稲作

6 日本の生い立ち｜狭い土地から生まれた、大切に使う心

7 日本の生い立ち｜足を知る国

9 歴史に見る日本の国柄｜エルトゥールル号

10 災害に見る日本の国柄｜じぶんよりも他の人を先に助けてあげて

11 暮らしに見る日本の国柄｜小さなペットボトル

12 ふだんの暮らしに見る日本の国柄｜毎朝の整列乗車

13 ふだんの暮らしに見る日本の国柄｜7分間の奇跡

日本と稲作

日本で稲作が始まったのは約6,000年前のことです。時代で言えば縄文時代になります。それからずっと稲作を続け、明治維新がきっかけで近代化するまでは80％から90％は農業に携わっていたのです。
農業というのは、狩猟とは違い、戦いではありません。稲の様子を見て、天気を見て、毎日の仕事を決めるという、自然とともに生きる仕事です。また、農業というのは個人の仕事ではなく、家族や地域で取り組む仕事ですから、自然と他の人や地域と助け合うということをしていました。それを6,000年も続けているから、日本人は自然と助け合うことができるのです。国として2,677年も続いているのも、争わないで平和に暮らしてきた稲作の歴史があるからなのかもしれません。

世界はどうだろう

他の国はというと、争うことで何度も王朝が変わったり、土地を奪い合ったりしている文化ですから、日本人ほど共に生きるということが難しいのかもしれません。

和

稲作を中心に栄えてきた日本人にあるのは、
自然とともに生きること、
周りの人と助け合うこと、
これを大切にしてきました。
だからこそ、
世界で最も古い2677年という長い歴史を
積み重ねることができました。

日本の生い立ち

狭い土地から生まれた大切に使う心

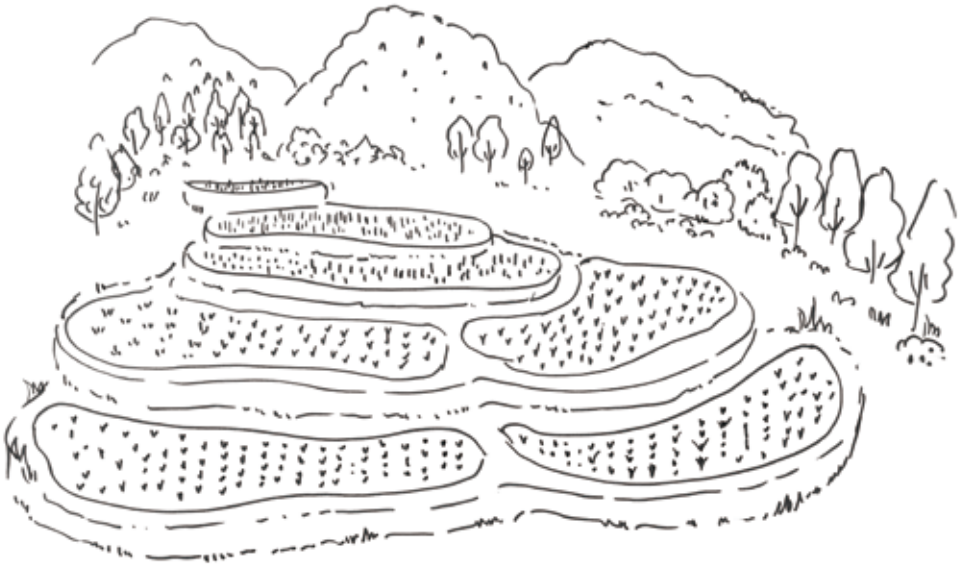
弥生時代から米を作ってきた日本人の職業といえば基本的には農業で、近代以前の日本の国民の80％から90％は農民でした。しかし、それほど農業に依存しながらも急激に土地を開発するようなことはせずに、代わりに山腹の段々の田畑を開き、灌漑施設をつくり、少しの土地も無駄にせずに、集約的に耕し、家畜は食用ではなく農耕に使い、土地の狭さと向き合い、工夫をしながら生活をしていました。

さらに、農業に携わる人が多かった日本人は、移動することなく同じ場所に留まり、そこにあるものを大事にしてきました。だから日本人は社会的にも政治的にも集団で生きることを求め、緩やかで儀礼的な社会をつくりました。そして、型と礼儀によって物質的な貧しさを補ってきたのです。また、個人行動は社会を乱すものであり、個人を集団を属するものとして考え、世襲制度を作りました。そうすることで競争をなるべく抑え、職業による階級に属するという社会規範を守りました。

そして、土地がないので開拓することよりも、むしろ守る、保存をすることを大切に考えてきました。そして、人びとが寄り集まって暮らすことを考え、土地の広さで幸福をはかるのではなく狭い土地や限られた空間の中で「幸福」とは何かを考え、工夫をしたのです。その中で生まれたもののひとつが儀礼です。

土地がないので、急いで開拓する必要もなければ、争うこともない。その分、大切に思う気持ちが発展して、政治、社会、家庭、ひいては戦においてさえも日本人は伝統的に正しいとする行為を基本としました。そして、日本人が大切にしたのは節約をはじめとする保存という考え方です。節約することをとても大切に考え、何物も無駄にせず、持っているものはすべて完全に使い切りました。

お金についても、近代に入る前まで、日本には貨幣経済というのもがなく、大部分が物々交換でありました。米が主たる富であり、お金の代わりになっていて、税金なども米などの生産物、もしくは労働で決済されていました。少数の人間の間では貨幣が流通し、金銭欲というものも存在したが、農村部において通過はほとんど使われることはなく、支配階級への支払いも米によるものでした。つまり、必要なものを必要なだけ交換するという考え方がしっかり根付いたということです。



歴史の中にみる国柄と、
暮らしの中に見る国柄について。

日本の歴史を振り返ると「和」という国柄が生んだ話が多くあります。また、みなさんの日常の中にもたくさんの「和」を感じることができます。みなさんも、自分の日常の中にある「和」を考えてみてください。

歴史に見る日本の国柄

エルトゥールル号

1890年9月16日、オスマン帝国（一部が現在のトルコ）の軍艦エルトゥールル号が横浜から自分の国に変える途中、現在の和歌山県串本町沖で台風によって遭難しました。これにより、600名以上が海に投げ出され、10人が自力で断崖を這い登り、串本町の住民が助けましたが言葉が通じず、手旗信号に寄って会話をして、オスマン帝国の船であることを知りました。その後、何とか救出した69名を串本町民は必死で介抱しました。台風が来ていたため、町には食糧がほとんどない状態だったにもかかわらず、町民は浴衣などの衣類、卵やサツマイモ、非常用のニワトリなどを提供して救護にあたりました。その後、乗組員はドイツの軍艦によって神戸の病院に運ばれました。この事故を知った明治天皇は可能な限りの援助をするように指示をされました。また、新聞各社も大きく事故を報道した結果、多くの義援金が集まりました。事故から20日後の10月5日、日本海軍の軍艦「比叡」「金剛」に分乗し、エルトゥールル号の乗組員は母国へと出航しました。
現在に至るまで、串本町では5年に一度追悼式典が行われています。

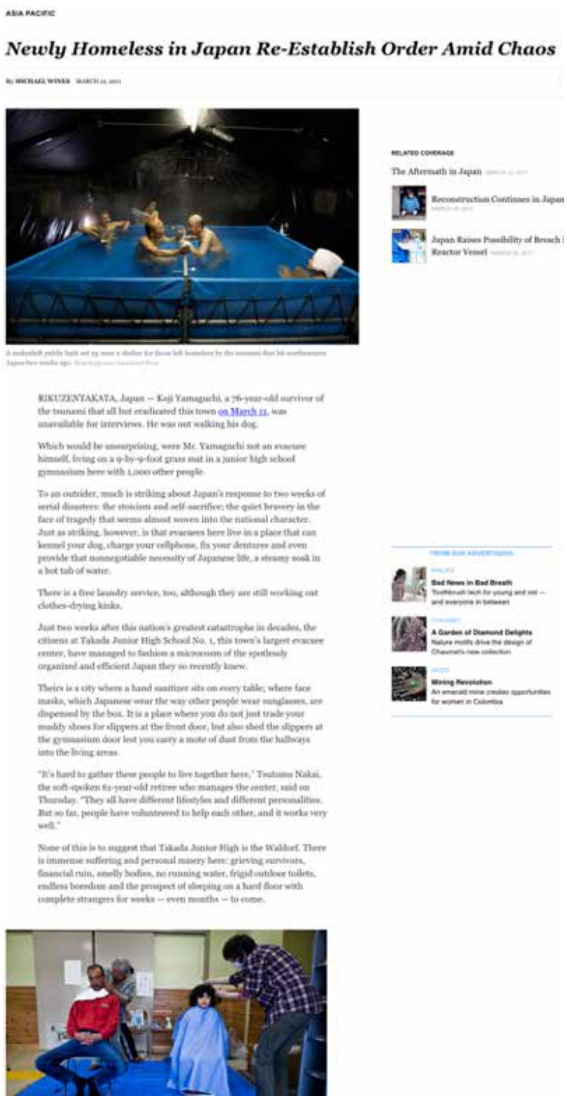
自分たちの食糧調達さえ難しいなか、遭難した人のために自分たちの食べるものを提供したこの行動は、日本の国柄と言えます。
このことがあったお陰で、95年後の1985年、イラン・イラク戦争のとき、空港封鎖によって出国できなくなっていた日本人をトルコ航空が封鎖2時間前に救出してくれました。トルコではエルトゥールル号の事故以来、学校でこのことが伝えられていて、多くの国民が日本に感謝してくれていたのです。

http://japonismlove.com/kinki/wakayama/eruururu.html

災害に見る日本の国柄

自分よりも他の人を先に助けてあげて

2011年3月11日に起こった東日本大震災。
震度7の地震と巨大な津波によって多くの命が奪われました。日本にとっては忘れられない悲しい災害です。こんなに大きな災害のときにも、日本の国柄が見られ、その姿に世界は驚きました。
それは何かというと、助け合いの精神でした。自分の家が流され、家族が行方不明だというのに、他の人を心配したり、水や食糧を奪い合うことなく、みんなで分けようする行動に、世界は感動したのです。実際、ニューヨーク・タイムズでは2011年3月16日に「日本の混乱の中　避難所に秩序と礼節」という記事を掲載しています。たとえばアメリカで起こったハリケーン・カトリーナのときは、奪い合いが起きていたのです。



ASIA PACIFIC

Newly Homeless in Japan Re-Establish Order Amid Chaos

By MICHAEL WINES MARCH 25, 2011

A makeshift public bath set up now a shelter for those left homeless by the tsunami that hit southeastern Japan two weeks ago. Kyodo News, via Associated Press

RIKUZENTAKATA, Japan — Koji Yamaguchi, a 76-year-old survivor of the tsunami that all but eradicated this town on March 11, was unavailable for interviews. He was out walking his dog.

Which would be unsurprising, were Mr. Yamaguchi not an evacuee himself, living on a 9-by-9-foot grass mat in a junior high school gymnasium here with 1,000 other people.

To an outsider, much is striking about Japan's response to two weeks of serial disasters: the stoicism and self-sacrifice; the quiet bravery in the face of tragedy that seems almost woven into the national character. Just as striking, however, is that evacuees here live in a place that can kennel your dog, charge your cellphone, fix your dentures and even provide that nonnegotiable necessity of Japanese life, a steamy soak in a hot tub of water.

There is a free laundry service, too, although they are still working out clothes-drying kinks.

Just two weeks after this nation's greatest catastrophe in decades, the citizens at Takada Junior High School No. 1, this town's largest evacuee center, have managed to fashion a microcosm of the spotlessly organized and efficient Japan they so recently knew.

Theirs is a city where a hand sanitizer sits on every table; where face masks, which Japanese wear the way other people wear sunglasses, are dispensed by the box. It is a place where you do not just trade your muddy shoes for slippers at the front door, but also shed the slippers at the gymnasium door lest you carry a mote of dust from the hallways into the living areas.

"It's hard to gather these people to live together here," Tsutomu Nakai, the soft-spoken 61-year-old retiree who manages the center, said on Thursday. "They all have different lifestyles and different personalities. But so far, people have volunteered to help each other, and it works very well."

None of this is to suggest that Takada Junior High is the Waldorf. There is immense suffering and personal misery here: grieving survivors, financial ruin, smelly bodies, no running water, frigid outhouse toilets, endless boredom and the prospect of sleeping on a hard floor with complete strangers for weeks — even months — to come.

RELATED COVERAGE

The Aftermath in Japan

Reconstruction Continues in Japan

Japan Raises Possibility of Breach in Reactor Vessel

FROM OUR ADVERTISERS

Bad News in Bad Breath
Toothbrush tech for young and old — and everyone in between

A Garden of Diamond Delights
Nature motifs drive the design of Chaumet's new collection

Mining Revolution
An emerald mine creates opportunities for women in Colombia

暮らしに見る日本の国柄

小さなペットボトル

外国のスーパーやコンビニエンスストアに行くと、日本と同じようにペットボトルが置いてあります。しかし、何だか様子が違います。何が違うのかというと、外国にはとにかく大きなペットボトルばかりが売っているのです。しかし、よく見たらペットボトルだけではありません。何もかも大きいのです。
それに比べて日本はどうでしょう。大きなペットボトルよりも、小さめのペットボトルが多いです。最近は350mlという飲みきりサイズのペットボトルまで登場しています。どうしてだと思いますか？

たとえばアメリカやカナダは、とにかく国土が広いので、土地に困ったことはありませんよね。だから、自然と大きいことが当たり前、もしくは大きいことが良いことだと思うようになったのではないでしょうか。
それに比べて日本は国土は広くありません。ですから、とにかく土地を大切に使ってきたのです。つまり、あるものを無駄なく大切にしようと工夫をしてきたということです。ですから、基本的に「残したくない」という気持ちが育まれたのだと思います。ですから、それがペットボトルの水だとしても、残したくはないと思うのです。そして350mlのペットボトルが生まれたのではないでしょうか。

ふだんの暮らし見る日本の国柄

毎朝の整列乗車

東京では毎朝、たくさんの人が電車に乗ります。通勤ラッシュと言います。電車のホームにはホームから溢れんばかりの人が電車を待ちます。できれば混雑は避けたいものですね。しかし、こんなところにも日本の国柄が現れています。それが「整列乗車」と言われるものです。
みんな急いでいます。早く電車に乗って会社に行きたいのです。しかしそれでも、順番は守ります。こんなことは日本人しかできないと言われ、実は外国人観光客のみなさんにとっては名物にもなるそうですね。

自分のことだけじゃなくて、周りの人に迷惑がかからないようにする。それを自然にやれるのが日本人です。これも国柄なんですね。

http://www.kabegami.com/shashin-bu/C00201/show/id/PHOT000000000003C40B/

ふだんの暮らしに見る日本の国柄

7分間の奇跡

皆さんは、新幹線を見たことや乗ったことがあると思いますが、たとえば東海道新幹線のぞみが、終点の東京駅に到着してから、今度は新大阪に向かって出発するまでの清掃時間は何分か知っていますか？答えはたった7分間なんです。16両編成で最大1,323名の乗客を乗せることができるわけですから、清掃だって大変なんです。でも、それがたったの7分間で完了してしまいます。清掃する人がスーパーマンのような人たちなのでしょうか。
もちろん、清掃するみなさんの職人技とチームワークは言うまでもないんですが、そもそも日本の新幹線ではゴミがあまりないんです。なぜなら、乗った人が自分のゴミは自分で捨てるからです。座席のリクライニングも多くの人が降りる時に直していきます。つまり、日本人の多くは次の人のためにゴミを捨てて、座席を元に戻したりしているから、7分間の奇跡は生まれていると言えます。
当たり前だと思いましたか？皆さんも外国に行ってみるとわかりますが、自分たちのゴミをちゃんと捨てている人はとても少ないですし、座席を元に戻すこともしません。皆さんが普通にやっていることも、実は日本ならでは光景なんですよ。

参考資料一覧

◆アメリカの鏡・日本 完全版 (角川ソフィア文庫)2015/12/25　ヘレン・ミアーズ、伊藤 延司

クレジット

テキストが入ります。

公益社団法人 日本青年会議所　国史教育委員会